



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）設立 30 周年、おめでとうございます。

NASHIM とのご縁は、チェルノブイリ原発事故への現地支援からでございました。事故 5 年後の 1990 年 2 月、日本財団の当時の理事長笹川陽平氏率いる経済ミッションのモスクワ訪問時に、前年に続いて、旧ソビエト政府から事故被災者への協力要請がございました。現地で支援表明された笹川陽平理事長が、帰国後、私どもに協力実践要請されました。当時の財団石館守三理事長、紀伊國献三理事らが放射線影響研究所 重松逸造理事長にご指導をお願いし、同年 8 月、長瀧重信先生らの現地入りをきっかけに、今に至る長崎との長い関係が始まったと理解しております。広島/長崎の原爆、ビキニ環礁、スリーマイルズ島事故はございましたが、第二次世界大戦後、人類が初めて経験した原子力発電所の規模を絶する事故は世界的問題でした。事故当時は中国、その後、アフガニスタンや WHO 本部での国際活動に関与した私自身、専門としていた災害・Health Emergency 分野において新たな対応や知見を得ました。

NASHIM に関しては、日本からの介入に加え、日本での現地人材育成の必要から研修生受け入れ活動が始まったと承っています。そして、それに関しても財団がいささかのお手伝いをさせていただけたことを光栄に存じていますとともに、私自身、数年前、チェルノブイリを訪問した際、その交流が単なる技術連携ではなく、日本…長崎と彼の地の人々の間の、現在も生きている密な連帯であることを実感し、改めて、実のある国際活動を継続されてこられたことに敬意を表する次第です。現地支援は 10 年で終了しましたが、NASHIM、長崎大学の関連活動は、その後、世界各地に広がっています。長崎拠点の素晴らしい発信だと感服いたしています。このようなご貢献は、その後、わが国が経験した未曾有の複合災害 東日本大震災の後でも、放射線関連の日本財団や私どもが関与した委員会や講演会での NASHIM 関係の先生方のご関与につながっており、改めて、お礼申し上げます。

放射線、放射能への正しい知識や理解を広げ、適正な活用をどうするか、道は遙かであることを理解するにつけ、いささか、悲観的気分がわくこと無きにしも非ずでございますが故に、NASHIM の長いご貢献に対し、改めて、心からの感謝とお祝い申し上げます。

改めて、NASHIM の存在の意義、その重要性と輝かしき実績を再認識し、今後、さらなるご発展とご活躍、そして世界のためのご貢献を切望する次第です。

本日は、おめでとうございます。

公益財団法人 笹川保健財団

会長 喜多 悦子